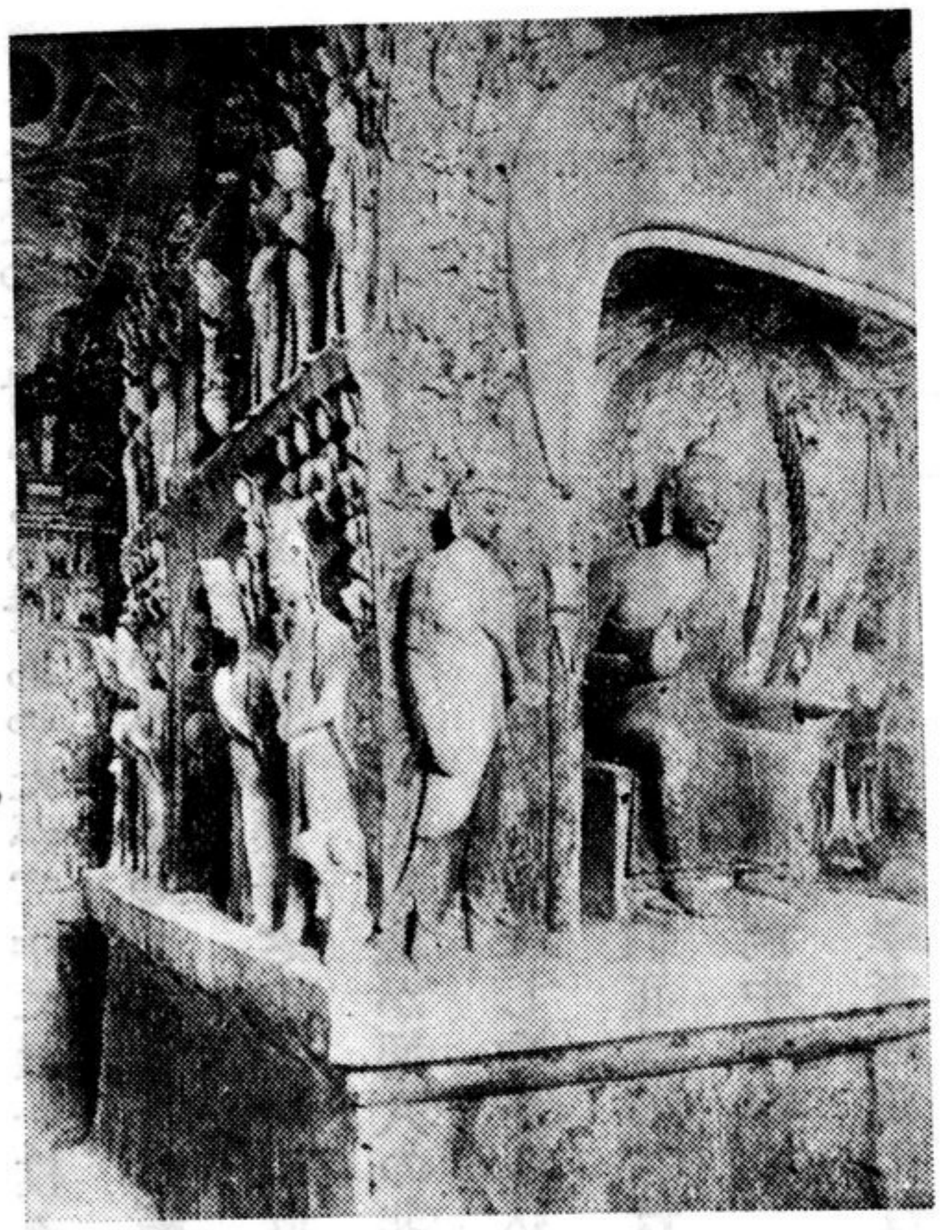
初より以後のものは一つもない、同一壁上に書いてある色の工合や、掘りつけた碑文などで、その様式や年代を區別することが出來るが、その最も古いものはほゞ五百年頃のもので、立派な極彩色の祭壇の如きも、中の佛像を祭る爲めに此時代に作られたものである、五世紀六世紀の頃に北方支那を一統した魏の時代の美術なので、近頃シャヴァンヌ（Chavannes）氏が山西河南などで研究した彫刻と同じく、此時代の繪畫の優秀を世間に示すものである、



二圖　第111洞の方柱正面

此外には九世紀十世紀のものが最も多い、しかしもはや魏の時の如き立派なものは認むることは出來ないで、氣品は衰へ、手法は拙く輪廓の線が非常に圓くなり、線はそうじて膠着して居る、要するに唐末の美術のデカダン期に屬するものである、十一世紀以後も千佛洞には屢々旅人が來たけれども仕合せなことには十八世紀の終り頃迄は、之を修繕する樣な篤志家がなかつた。

遺書の發見については地理學會の歡迎會で次の樣に演說して居る。

自分はウルムチに滯在中に、千九百年に敦煌の佛洞の中から文書を發見したといふことを聞きまた此地に居らるゝ端郡王からは、その時に出たものだといふ八世紀頃の寫本を貰つた、その發見の次第は、道士 Wang-tao といふものが、ある大きい佛洞を掃除した序に次の小洞を開いて見たところが、偶然澤山の書物を見付けたの

ペリオ（Pelliot）氏の中央亞細亞旅行